

Computer Report

Vol. 56 No. 12 12月号 (通巻 747号)

はじめの言葉

■主流メディアの予想を違えて、絶対的不利だとされていたトランプ候補が次期アメリカ大統領に決まった。世界中が大騒ぎだ。騒ぎの根源は、グローバリズム提唱の第一人者であるアメリカが、一気にローカリズムの次元に引き戻す決断をしたことにある。トランプの標榜する「アメリカファースト (アメリカ第一主義)」とは、まさに源流アメリカ人の本音であり不気味である。グローバリズムとは何だったのかの思いなど吹き飛ばされている。

■先に EU 離脱を決めたイギリスの国民投票も、言ってみれば「イギリスファースト (イギリス第一主義)」の考え方が源流にある。ここにもローカリズムの台頭を強く感じ取ることができる。EU というグローバリズムに次ぐリージョナリズム (地域社会重視主義) を否定した大英帝国国民の決断、そしてアメリカ人の決断。相次ぐ英米の自国第一主義、まさにアングロサクソンの身勝手さを強烈に象徴する歴史的事実として受けとめたい。

■かのドイツのビスマルクは、「周辺国は自国に不利になると国際法 (ルール) を変えて押しつけてくる」と言ったそう。実はその前があつての話で、「国際法を先に押しつけて来て、それに従ってこちら (ドイツ) が動き、競走に勝つ」と、「周辺国は～」という指摘がある。産業革命後の貿易/金融の市場開放論の押しつけも、ほとんどがアングロサクソン主導で仕掛けられてきたことだ。グローバリズム提唱の基本コンセプトだった。

■明治維新後、日本は文明開化国を創造しようと新憲法の導入を図った。岩倉具視、大久保利通以下がそのために渡仏留学、フランス憲法を学んだことは周知の通り。帰国に際して欧州列国を訪問した。ドイツ統一を果たしたビスマルクに一行が会った時に指摘されたとされるのが前述の話である。「ドイツは、周辺列国に対当するための憲法を持っている」とも言われた。果たして日本新政府は、ドイツ憲法を模して大日本帝国憲法を作った。

■歴史は繰り返されるとは言え、アングロサクソンの基本的理念が、奇しくも、その人種的系譜を色濃く持っている英米人によって改めて見せつけられたと言えなくもない。列国の提唱する国際法 (ルール) に則ってきたドイツ/ドイツ人は今、この歴史の 1 ページをどのように捉えているだろうか。当然にして、ビスマルクの残した多くの言辞について、より多くを知っているだろうし、肌で感じる歴史に晒されてきたはずである。

■全地球的な規模すなわちグローバルなレベルでのオプチマイゼーション (最適化) を模索している中であつて、自国民の、すなわちローカル/パーソナルな思いを第一義/最重要だとして全面的に押し出してくるアングロサクソン系人種国の乱暴ぶりを、改めて今、全世界が思い知らされた格好だ。これを冷静に「繰り返される歴史の 1 ページ」として、今一度容認し、受容すべきかどうか、世界中が問われているように思える。

■情報処理の世界でも、グローバル (全地球規模での) 情報システムの最適化か、リージョナルな (地域) 最適化か、ローカル/パーソナルな最適化を目指すべきかで、絶えずその基本設計姿勢が問われてきた。SNS の基本システム思想、クラウドサーバー基本技術、そしてそれらの運営運用の基本テクノロジーの、ほとんど全てをアメリカに集中的に握られている中で、世界各国は非常に重苦しい新年を迎えることになりそう。 (藤見)